

【ねがいはしては】

令和2年4月25日

KYOWA SCHOOL

第354号

「一番の先生はお母さん」

学校が長期にわたってお休みになってしまう。夏休みなら気持ちも慣れていますが、普段であれば行っていることがあたりまえがあたりまえではない。しかも常に感染の心配をしながら時を過ごす。我々大人たちでさえ、心理的なダメージが大きいところへ、子どもたちの不安は想像をはるかに超えるものと思います。そんなとき、しっかり心を温めてくれる人は、家族になります。一番みじかな存在はお母さんです。その一言一言が今までに無いくらいに重みを増したものになります。そんなことを書いてしまうと、今度はお母さんにストレスが行ってしまい、コントロールができなくなってしまふことだけは避けたいところです。

で、この長いお休みの期間中、私もいろいろと考えていました。以前からの土台的な考え方は少しも変わってはいないのですが、今までは、『私ひとり、ここ（教室）でできること。』に、執着しすぎていたな。そうではない、皆で協力し合うことが大切だ・・・です。

私の中にある土台のような考え方は、『生きようとする力』です。文部科学省がよく言われるのが、『生きる力』です。私の掲げる『生きようとする力』は、今まさに子が自らの力で歩もうとしている、生きようとしている、そのような心根が定着すれば、という感覚です。例えば、テストの点が悪かったときに、「あー、もうダメだ。」とやってやる気をなくしてしまうのか、それとも、「くそー、今度は頑張るぞ。」とやって奮起する。もうひとつあります。「そーか、それにしても何が原因でここが間違っていたんだろう。」です。私は、この3番目の心理を目的としています。

たまに、高校生たちと話に興じることがありますが、このような話題を取り上げることがよくあります。つまり、点数に無頓着な状態です。こだわるのは、『わからないままになっている』ここ一本です。

学びの本質は、「わかったー、なるほど。」の喜びです。漢字テストでも「上」という漢字の書き順は、なぜ、縦・横・横なのだろう。「土」という漢字は、なぜ、横・縦・横なのだろう、といった具合です。様々なところに自然に疑問が湧き、それを探求しようとする心、それこそが真の学び、生きようとしている証だと思っています。ところが現実そう呑気なことを言うてはいられません。次から次へと「覚えなさい」が待ち構えています。漢字は書ければOK！読めればOK！・・・。

そこでお母さま方、ご家族の皆様の登場と相成ります。学校から返却されたテストの「点」の部分をはさみで切り取って破棄、そして保存する。点数なしのテスト結果です。これは「お母さんはね、点数のことなんかちっとも気にしていないわよ。気にするところは、わからないままの部分、何が原因でわからないのか、そこがたいせつなところ。真剣に考えてわからないのだから、そのままにいる方が危険だから・・・だってそれが原因で次が分からなくなったらもっと大変でしょ、それにまぐれで合ってしまったところはもっと危険、正直にしっかりと考え直しをすることの方が最も大切なよ。点数はあまり関係ないというわけ。」

子どもたちに対する点数崇拜主義は、ドラえもんの影響が結構大きいと思います。(笑)

小学校一年生、はじめて教室に入って、さあ、これから勉強頑張るぞ、というあの前向きな瞳。それが、ひとたび、「アレッ」という点を取り、周り（友だち・家族）からたった一言誹謗中傷の言葉を浴びせられただけで、勉強は怖いものへと変化していきます。高所恐怖症・車酔いなど、もう二度と味わいたくないという先入観がしっかり宿ります。治すのには相当な努力・時間が必要になります。そして何より怖いのが、勉強はテストのために行うものという感覚もしっかり宿ってしまいます。

ルール・・・学校へは何で行くの・・・分からないことを分かるようにするために行く。知らなかったことを知ることができて、うれしかったという気持ちを受け取りに行く。とても素朴なものの考え方だと思いますが、私なりの素直な感覚をそのまま表しただけです。

とても強く実験してみたいことがあります。

幼稚園・保育園に行かれていますお子さんが、初めて小学校へ行き、初めてテストをしたとき、その時から、「テストの点は関係ないよ、分からなかったところを分かるようにすることが本当の勉強なのよ。」で、発車してみたいのです。

当然、お子さんはテストで分からなかった部分をどんどん聞いてくると思います。それに、選択問題であっても、分からないところは正直に選択せず未記入で取り組むと思います。

こんなふうに、素朴に「わかりません」をあたりまえにして持ち帰ってくるのが、『生きようとする力』の原点になっていくのでないでしょうか。(本来は「わかりません」を学校の先生に言うのがベストです。)

この取り組みは、私ひとりではできることではありません。ご家族のあたたかいお子さんへの眼差しがあつて初めて実現できることなのかなーと、感じています。

「おかあさん、わたし（ぼく）ね、えらびなさいのもんだいでね、わからなかったからえらばなかった。」

そんなお子さんに出会えたおかあさん、しあわせですよ。